

母親から伝えられ、学び育てる母性について

産科分娩部：一ノ瀬文穂

1. はじめに

まだ家庭分娩が中心だった頃、お産は生活の中に密着した身近な一大イベントであった。しかし現在は、家族とはある程度隔離された施設内分娩がほとんどで、自分の身近でお産を経験する機会はほとんどなくなった。Brazelton¹⁾は、「核家族文化の最も悲劇的な点は、ほとんどとはいえなくても多くの女性が、自分の子供を持つ以前に子供を養育するという場面に遭遇したことがないという事実である」と述べている。一方、お産に関する知識や情報を、専門雑誌やお産の学級への参加等により簡単に得て、「こんなお産がしたい」と前向きになってきた。ところが実際は、自分のイメージしていたお産ができず取り乱してしまう人も少なくない。日頃、分娩に携わるなかで「一番身近な存在で、大先輩でもある母親からどんなお産が伝えられ、どんなアドバイスがされているのだろうか。母親からの影響が大きいのではないか」と感じる。今生まれた子供たちも十年余りで初潮を迎え、いずれ母となっていく。その時、母親としてどんな話をしてあげるのだろうか。母親から伝えられ、学び、育てていく母性について調査し、助産婦としての対応を考えてみようと思う。

2. 研究目的

- (1) 産婦が母親からどんなお産を伝えられ、お産を終えた時どんな気持ちかを知る
- (2) お産に対するイメージやその体験を分析する

3. 研究方法

- (1) 期間：平成4年 7月～9月
- (2) 対象：当科にて分娩した産婦 15名
- (3) 方法：面接方式により、母親から妊娠、出産についてどんな話を聞いたか、どんなアドバイスを受けたか、また今お産を終えてどんな気持ちかなどをアンケート調査

4. 研究結果

(1) 母親から聞いたこと

妊娠については、「つわりがひどくたいへんだった」「おなかが大きくなっても農作業をしたり、生まれた夜の夕方まで仕事をし頑張っていた」などである。出産に関しては全員が、母親から自分や夫の出生時の様子を聞いている。内容は、「2日くらい苦しんで、難産で時間がかかった」「腰が痛くて入院したら3時間で生まれた」「生むときに痛かった憶えはないが、後の傷がつかった」「痛くて、病院の窓から飛び降りようかとおもった」「破水はおねしょのようだった」などである。また、お産を心配して、自分と同じように時間がかかるのではないかと、痛い思いをするのではないかと等言われた人もいた。しかし、「もう忘れちゃったわ」と言いながら少しだけ話してくれたという人がほとんどであった。アドバイスを受けた人は少なく、「大声で叫んだりするものではない」と言われた人もいた。なにも言われなかったが、待機室入室中に母親が今の状

況を聞きに何度も病棟に顔を出していることを知り、頑張らなくてはと思ったという人もいる。出産前後の様子、例えば、生まれた瞬間の状況やその時の感情等はあまり聞いていない。

(2) お産を終えた気持ち

自分が考えたよりも陣痛の痛みが強く、長くてつらかったこと、「こんな程度なんだ」と思うほど痛みが楽で3回程いきんだらすぐに生まれて嬉しかったこと、破水して羊水の流れる感じが気持ち悪かったこと、どうしていいのかわからなくて不安で大声をあげてしまい今になって恥ずかしいこと、なかなか子宮口が開かなくてイライラしたこと、いきんでいる時「頭がでてきたよ」と言われ頑張れたこと、「今は赤ちゃんも苦しいんだよ」と言われ我に帰ったことなど、率直なものが聞かれた。また、「自分もこんなおmoiをして生んでもらったと思うと母に対する気持ちが変わった」「初めて赤ちゃんを抱いた時の何とも言えないあの気持ち・・・いつかこの子にも感じさせてあげたい」「娘にはこんなつらいおmoiをさせたくない」などの言葉も聞かれた。私達が、日頃お産に携わっていると、お産を終えてまだ分娩台にいる産婦が初めて自分の赤ちゃんを抱いたとき、「お産は大変だったけど、赤ちゃんを見ていたらさっきまでのつらさが和らいてきた感じ。生んでよかった」「わあ、かわいい」「ちっちゃいね」「誰に似てるかな？赤くてしわくちやだよ」「お母さん・・・くすぐったいような不思議な感じ」「すごい、おっぱいをすったよ」などの言葉も聞かれる。

5. 考 察

今回の調査を通し産婦から聞いたお産を終えての気持ちは、私が考えていた以上に具体的で、率直な感情であった。しかし、産婦が自分の母親から伝えられたものは陣痛のつらさ、陣痛はどんな痛みか、破水がどんなものであったか、どのくらい時間がかかったか、どんな状況でお産が始まったかなど分娩自体に対する表面的なもので、内面の感情は伝えられておらず、また「もう忘れちゃったわ」と言われた人がほとんどであり、子供を生むということは人生の中でも忘れられない大きな出来事のはずではないのだろうか？と残念に思う。Bibring²⁾は、「妊娠とは女性の生涯における一つの主要な転換期であり、それはまさに典型的な危機（危機とは各個人の生涯における方向転換の時期）の一つを代表しており、とくに初産婦にとっては、はじめて妊娠という衝撃的な出来事に直面するわけである。われわれは、全女性は妊娠したときは、すばらしい変化、広範囲にわたる心理学的変化を示すと考えている。こうしてこの危機の結果は、初期の母子関係に深い影響をあたえていく」と述べている。ひとりの女性が母性を育てていく中で、母親になるという一大イベントをもっと大切に、その時感じた様々な気持ちを温め、これからの人生に生かし、子供に伝えていってほしいと感じる。

分娩が終わり初めて赤ちゃんを抱いたとき産婦がとても良い表情をしていて、私まで一緒に何か熱いものを感じることもある。「生んでよかった」「かわいい」などいろいろなつぶやきが聞かれ、喜び、戸惑い、感動、安堵感などが伝わってくる。こうした感情は、今お産を終えた産婦の母親達もおそらく昔感じたであろうと考えられるが、娘には伝えられていないように思われる。これらはごく自然な感情なのであるが、素直で自然な感情だからこそ大きなエネルギー源であると気が付く前に、自分でも知らず知らずの内に少しずつ忘れていってしまうのではないだろうか。お産の後で私達助産婦が産婦と共にお産を振り返り、働きかけることによってこうした感情を再認識し、母性

確立へのステップとすることができるのではないだろうか、母親として、今度は娘にも伝えていけないのではないだろうか、と考える。Brazelton³⁾が、「赤ん坊に対する愛着はごく自然にできるものであり、・・・(中略)・・・しかし、このように順応するのがむずかしい女性が非常に多いこと、またこの人たちにとっては、理解ある支援者がおれば事態は決定的に違ったものになることも事実である」と述べているように、私達が、もっとひとりひとりのお産の大変さを理解し、援助して、一緒に感動できるような係わりかたをしていくことが必要であろう。

ひとりの女性が、妊娠、出産を経て母親になっていく。その過程で自分の母親から、同じ母親となる過程で感じた様々な感情を伝えられることにより、より確かな母性が育てられるのではないだろうか。母と子という関係から母親という対等の関係になる、自分が母親として頼られる立場になるという自覚、現実感をもつことによって、教科書的にどんなお産がしたいかというものだけでなく、お産に対する姿勢、意気込みが違ってくるのではないだろうかと思う。分娩時の取り乱し方も違ってくるのではないだろうか。

みんな「いいお産がしたい」と思っている。それが、産科学的な経過や、どんなお産をしたかということだけでなく「子供を生んで良かった。そして自分の子供にも、お産をしてほしい。」と思えるようなお産であってほしいと思う。今回の調査で係わった人の中に、退院時に「3人の娘にそれぞれのお産のことを書いたノートを渡してあげようとおもいます。」と言ってくれた人がいたことはとても嬉しいことであった。

6. まとめ

今回の調査を通して、分娩後に産婦とゆっくり係わることの大切さをあらためて感じる事ができた。調査は、今お産を終えた産婦に母親から何を伝えられたかを聞き、実際にその母親が何を伝えたか、またお産をした時代が家庭分娩から施設内分娩へ移行した頃であったという背景までは考慮することができなかった。さらに、ここで係わった産婦が次の世代へどう影響していくかということには、調査の限界がある。しかし、お産に対するイメージがプラスの方向へ働き、少しでも母性の確立へ協力できるようひとりひとりのお産に愛情をもって携わっていきたいと思う。

引用文献

- 1) 竹内 徹他, 訳: 親と子のきずな, 第一版, 医学書院, 1988, P 14, L 24-L 26
- 2) 同 上 P 15, L 22-L 26
- 3) P 16, L 10-L 15

参考文献

- 吉村 典子: 子どもを産む 第一版, 岩波書店, 1992
きくちさかえ: お産がゆくー少産時代のこだわりマタニティ 第一版, 健康双書, 1992
竹内 徹他, 訳: 親と子のきずな 第一版, 医学書院, 1988